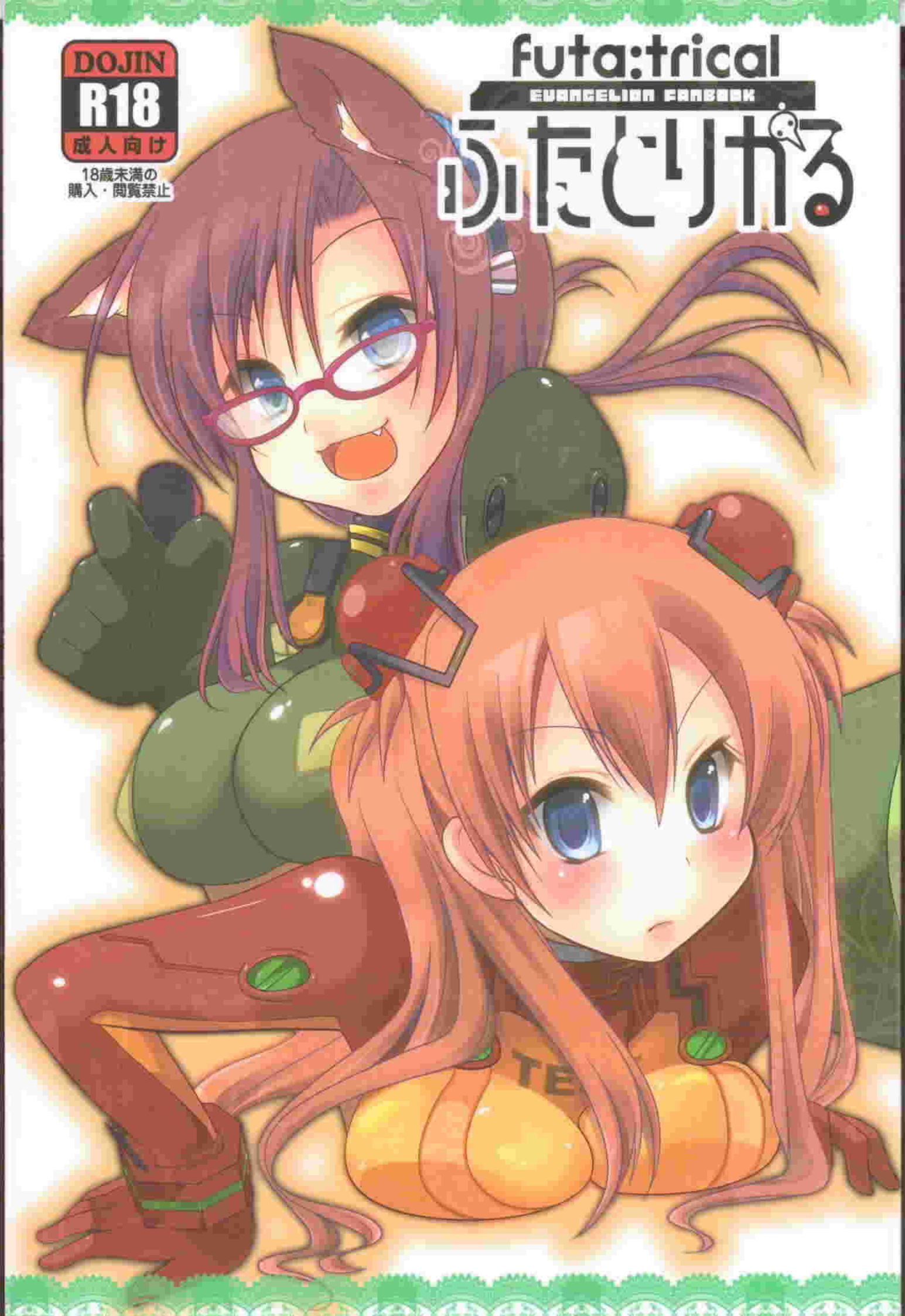
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

futa:trical

EVANGELION FANBOOK

ふたりがる



futa:trical
EVANGELION FANBOOK
ふたとりかる

前書

初めましてやそうでない方もこんにちわ。雪路時愛(ゆきじしあ)です。
んーちゃかむーむー同人誌第三弾目となったこの本を
お手にとって頂きありがとうございます。
今回はなんとエヴァ本でふたなりですっ。
エヴァは何回見てもおもしろくて、そして深くて…。
新劇場版もとても面白くてQが待ち遠しいです。
破でTESTプラグスーツと旧型を見た瞬間、このお話を思いつきました。
なんていうか旧すくのスカート部分(水抜き)に似た要素が…ごにょごにょ…。
漫画にはマリとアスカだけしか出てきませんが、
味燐ふーかさんの小説で、綾波やシンジも登場しますっ!
漫画も小説も最後までお付き合い頂ければ幸いですっ。
それではお楽しみくださいませ!

2009・12月　雪路時愛

索引 INDEX

04 前書

05-19 雪路時愛
『ふたとりかる』

20-24 味燐ふーか
『エクスペリエンス
ニアデイズ』

25 後書
26 奥付

COMIC MARKET77
'n'-cyak-m-mu- presents

あ〜〜んっ、もう！

ったく！なんで私がえこ贔屓とバカシンジに劣らなきゃならないのよっ！

ズカ

ズカ

ミサトもミサトでバカシンジのことばっかり心配しちゃってさ！

シンジ君大丈夫かしら？

はい！大丈夫です、ミサトさん！

ぎゅ

ぐぅ

私が一番に決まってるじゃない！

ズカ

ズカ

こんな時ははやくアレを…

シュー

まったくやんなっちゃ…う…

え…。
にゃっほー♡
シャー
——っ
またアンタね
お邪魔してるよ。
なんでアンタがここに…
!?
ちょ
ちょっ
!!

バシッ
きゃっ！痛っ！
きゅっ♡
ビクッ
この部屋から素敵な匂いがしてたのはやっぱりキミのせいだったんだね。
クンッ♡
クンッ♡
ーっ!!
ピクッ
ちょっ
他人の匂いでこれほど興奮するのはめったにないよ…っ、はぁっ…。
あっ
すすすっ
はっ
もっ!!
はなしなさいよっー
どんっ
クスクス
いったいなー。アスカちゃんはコレだから…。
キ
アンタ！無断で入って何して…
見ちゃったんだ♡
はっ
はっ

私、知ってるんだから。アスカが誰もいないこの部屋でいつもしてることを…ね♡

ビクッ

あ…アンタ…

んぁあ♡

はぃったぁ♡ふとい…っ♡

ピッ

ゴクッ

あはっ♡気持ち良い♡いっぱいいっぱい濡れちゃってる…♡

見て欲し…い、あ、あたしのオナニー姿ぁあ…はぁん♡あふぅ♡

ビク

ビク

ぴっ♡

ヴヴヴヴヴ

ぴっ♡

凄いよねー。この部屋でエリートのアスカちゃんがまさか無防備にこんなことしてるなんて。

いっちゃう♡いっちゃぁあ♡

もぅ♡あひ♡

ふる

やめっ…て…

ふる

や…

もしかして今からまたしようとしてた？今日でもう2回目だよ？

むきになるところがますます怪しい。

っ――ちがっ！

それに一人でするよりも二人のが良いに決まってるじゃん？

私としない？

す…好きにしなさい！

イイ匂いのキミとエッチなことするなんて夢みたいだよ…。

何をしたらいいのよ？

やだ…なんだか私…ドキドキしてる…

まぁイイからキミはこれを見てて。

はぁ？プラグスーツがどうしたっていうのよ？

裏コード ザ・ビースト！

なっ

なによそれ！

肉体と同化していて、サイズは感情とシンクロしているから自由自在ってにはいかないってわけ。

このネバネバの汁が溢れてるでしょ？キミに興奮してるって証拠。

すごいにおい…

私の童貞チンポで
キミを犯したいんだ。
はっ
はっ
こんな…
大きいの…!
ドキ
ドキ
ドキ
ほらぁ…太くておいし
そうでしょ？
ねぇ？
玩具と比べ物
にならないよ。
試してみたい？
やめっ！
やめてっ！
ねぇ…
ほら食べて。
ぐっ
んぁ!?
はぁ～ん♡お口の中
もエリートなんだね。
あったかくてきもち
いいにゃぁ♡
んっ
ちゅぽ

嫌っ！こんな…っ汚い！
あー…♡喉まんこ絡みついてきてすごくきもちいい…♡こんなの反則ぅ♡
あっ♡あっ…すごいっ♡きもちぃ♡もっと舌使って！吸って！ちゅーって吸って♡
ねぇ！顔にかけていい？ねぇ！顔にかけていい？
でるっ！でるよぉっ！
ぐっ！ぐぐっ！！

でるよ？かけるよ？
かけちゃうからぁっ！
出…っ…！でちゃうっ…
あぁぁあっ♡

ビュクビュ

ビュクビュ

ゴクッ

すこし飲んじゃったかな？

ゲホ

ゲホ

ゴクッ

おえっ

はー♡

はー♡

これが…精液？
すごく濃くて…

はぁ♡

はぁ

どろーっ

おいし…い…

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

はっ

やるなら早くしなさいよっ

ん？

たくさん…
精液が欲しい…っ

いいからそのバカちんぽで
私を少しでも気持ちよくさせてみなさいよっ！

はっ

ドキ
ドキ
ドキ
かぁぁっ
ぐいっ
クスッ♡ 言われなくても犯してあげる♡
アスカにゃんのおまんことシンクロ成功しちゃうかにゃ～？
ぱーしゅ
ぱーしゅ
やだ…そんなこと…
さっきより大きくなった…あ…あんな大きいのを…
レロ
ぴちゅっ
ビッ
もう濡れ濡れじゃん？イラマチオで興奮するなんて案外ドMだったりして？
ん♡
ぐっ
ぐっ
ぐっ
ぐっ
ん♡
ん♡
――っ!!!
うるさ…
ずっ
いくよっ
いあああああ
ぷぷ
ずちっ
ぬちっ
ぬちゃ
ずちゅ

ひぐっ♡
あッ♡あッ♡
太くて押し広げ…られ…るっ…
壊れちゃ…
いきなり…とか…
この…ばかぁぁっ…♡
ぎぢっ

ねぇ、どう？
私の気持ちい？
ひぁっ♡
ぬいてっ！
ぬいてぇぇ――――っ!!
な・ん・で？
ひぐっ♡
ん――――っ♡
ど・う・し・て？
こんなの、しんじゃう!!
しんじゃうからぁぁぁぁ!!!

アスカのきつく締まって、あたたかくて吸い付いて、すごーく気持ち良いよぉ♡だからやめてあげない♡

はぁ——っ♡

あっ♡

あ♡

マリっ♡

はぁ——っ♡

ズッ ズッ ズッ ズッ ズッ

ぱんぱん

ズプッ

ゾクゾク

どう？

どうっ？

玩具より良い？気持ち良い？

生ちんぽすごく良いっ♡

ゾクゾク

チュプッ

ズプ

ズプ

はぁぁぁ来るっ♡

うそっ！すごいっっっ♡

あっ♡

イっちゃ…おしっこでちゃぁぁぁぁ♡

ぷしゃっ

ぷしゃっ

ビクッ

ビクッ

ぷしゅっ

あ——♡

あぁ——…あっあ♡

あ——♡

アスカいっちゃった？いっちゃったんだ♡

わたひ…いってる…っから…動いちゃ…やっ

かわいっ♡

はぁ——♡

は——っ♡

でも、ごめんね。止めないよ♡

あッ♡

まだ…いっ…てる途中な……の——…

あっあッ♡

ひぅっ♡あっ♡

ま…マリい…

んっ？

キス……して♡

いっぱぁい…キスぅ…♡

アスカ可愛すぎぃー♡こんなの反則ぅ♡はっ♡あんッ♡
イクッ♡
んあっ♡ あっ♡
いってぇ…たくしゃんだしてぇ♡
ばん
ばん
ばん
ばん
TEST
イクッ♡
イクッ♡
かあっ
ゴクゴク
ドキ
奥に出すよ！出すからね！出るっ！射精しちゃう！
きてぇ♡っ私も…イっちゃうからあっ♡
ぴゅっ
きゅーっ
ドピュ
ドピッ
ドピッ
ぴくっ
ん〜〜っ!!
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ

オナニー姿が見られたかったんだよね？アスカちゃん？ネルフのわんこ君がこの姿見たらどう思うかな？
あれ？想像してまたいっちゃった？ちんぽでイク快感たまんないでしょ。次はその包茎ちんぽで私の処女犯しちゃう？
ねぇアスカちゃん？
あっ♡またでるっ♡マリ、みてぇ♡
はふぅ♡はふ♡触らなくてもでひゃう♡ちんぽしゅごくきもちぃ♡
ビュル
ビュル
ビュル
ビュル
ビュル
あっ♡
あっ♡
あっ♡

エクスペリエンス ニアデイズ

味燐　ふーか

その時、僕は灰色のモザイクかかった空間に誘われた、確かネルフへ行って初号機に乗り無我夢中に使徒を仕留めることばかり考えていた為かあまり覚えていない。只、明確に覚えているのはミサトさんとリツコさんが僕の名前を叫んでいたという事は覚えていた。

＊

[ああ、そうだった、確か……その後、目の前が見えなくなったんだった。]

モザイクの空間をボクはブーンというノイズ音がする方向に吸い込まれるようにその先にある暗い空間へ堕落していく。それはとても怖いようで何故か居心地が良い空間でもあった。

その空間へと着いた時、ボクは視野を広げているのかわからないくらいに暗い空間へと誘われた。

それから、空間の中でボクは「何、ココはどこ？ボクはどうしてこうなってるの？」と叫んでみたりしたけれど壁すら無くどこまでも続くような空間。反響音すら消されてしまうような孤立した空間である事はボクでも理解が出来た。

その場に体育座りをした後に鼻から滲み出る水を着ている服を使って両腕で拭取っていた。服の感触からボクは制服を着ていることに初めて気付いた。分かるのは僅かに感触がある床だけでそれほどに暗い空間であった。

と、ボクの前に小さい光が射しているのをうっすらと感じた。どれくらい前なのかわからないが少し長いトンネルの出口を入口から見ているくらいの距離と思えた。

見間違えかと思い、もう一度振り返ってみるとそれは段々ボクに近づいている。ボクは助かりたいのかは分からないけれど、そこに何があるのか知りたくなった。座っていた足を崩して歩くことにした。

段々、身体から血が抜けたかのように軽やかになる。やがてその光は懐かしい暖かな光に変わっていくように、ボクはその光に身体を預けてしまいそうになった。軽やかになった身体はやがて重力を感じ始め、光の向こうへと浚われていく。

光が透き通るようにボクをすり抜けた。エヴァに乗っている時によく見る放射線とはまた少し違う感じだった。再びボクは瞼が厚くなり目の前が真っ暗になるのを感じた。

＊

――目を開けると部屋の中で倒れていた。ミサトさんの部屋よりは小さい部屋。一周ぐるりと視野を廻らせて当りを見渡した。夕方くらいの明るさの人の気配がしないそれと同時にどこか埃っぽい匂いがする。

少し肌寒い……立っているだけで身震いするそればかりか非常に物が少なくて殺風景な部屋だと思った。

「ここは……確か……」

――見たことがある、初めて来た場所では無いと思う。心の中で懐かしいと思う気持ちが残っていた。

奥のほうで玄関が開く音を聞いたボクは一瞬ドキリとした。こんな所を見られてしまうとボクはこの部屋に不法侵入したのと一緒になる。ボクはその場で焦ってしまい体をソワソワさせていた。

玄関から現れたのは水色のショートカットに制服の彼女。そう、彼女は綾波レイだ。この部屋は綾波の部屋だ。相手がわかった瞬間に少し肩の筋肉が解れた。

「あら……貴方だったの……こんな所で私の私物を探りに来たのかしら。あいにくこの部屋には物があんまり無いの、残念ね」

「そういう意味じゃないよ。ボクもよくわからないけど勝手にココに連れていかれてさ……」

話を聞く暇も無く、彼女はボクの前に立って服を脱ぐ準備をしていた。

「着替えるの……手伝ってくれない?」

「は……そんなのボクは出来ないよ」

「貴方じゃないとダメなの」

女の子の肌にいきなり触れるなんて、そんなこと出来ないと思いつつ頼まれた事だからと制服のフックを外していく、簡単に脱げるようでそうでも無いらしく思ったよりも時間が掛かってしまう。何故かその時焦らされているような感覚があった。そのたびにダメだ、ダメだと思っているのにも関わらずボクは欲情していく。

「綾波……これでいいんだよね?」

「ありがとう、怪我をしている所があって思うように身体が曲げられなくて脱ぐが大変だったの」

ストンと床にスカートが落ちて、その後にブラウスが脱がされる。白いショーツとブラジャが現れてくる。それと同時に白い素肌が見えてくる。

「全部脱げたみたいでよかった、じゃあまたネルフで会おう」

颯爽と何事も無かったように部屋を立ち去ろうとした時、彼女の制服を踏んでしまい、足元が不安定になったまま、そのまま彼女を巻き込んで倒れてしまった。彼女がボクの下にいる……こんなはずじゃなかったのに困った事になった。

今日の彼女はいつに無く穏やかだった。彼女のこんな顔を見たことが無い、別人のようで何故か懐かしい匂い。

「怪我は無いわ……それより貴方のほうが心配だわ、どうにかしてくれない?」

彼女はボクの下半身に視線を送り恥ずかしそうに伏し目をしていた。

「どうしたの?あっ……」

「下……何か当たってるわ」

言われた瞬間にボクは手で秘部を隠してしまった。勃起していたとは言えダイレクトに言われると恥ずかしいものがある。

「ゴメン……そういうつもりじゃなかったんだけど……」

「碇君ってゴメンが口癖みたいね」

少しの間沈黙が続いた、今の状況、ボクは止められないくらいに彼女としたいと思っていた。

「綾波!……ボク、止められない……止められないよ」

ボクは正常位に近い体勢になり彼女の体を肩から胸にかけて撫でながら、ブラジャとショーツを脱がしていく、白い肌が現れていく毎に心臓の高鳴りが激しくなっていく。

「あっ……碇君ダメ…そんないきなりあっ……」

「いや……？結構、感じているみたいだけど」
そして、左右に乳首を舐めてみるとピンク色の突起が今にもはち切れそうな程になっていく、最初は緩く、そして次は激しく。
「違う……あんまりし過ぎたらおかしくな……」
「ボクもおかしくなりそうだよ……下も触ってもいいかな？美味しくなってるかも知れない」
乳首を愛撫をしつつ彼女の膣へ手を差し延べると愛液で溶けて熱くなっていた。クリトリスを刺激すると彼女は声を漏らしていた。
「あっ……ああっダメっ……」
「どうしたの？手を触れただけなのに……綾波って凄くエッチだったんだね……ねぇ、ボクのココも我慢出来ないんだ……舐めてほしいな……」
スッと彼女の顔の前にチンポを差し出すとトロンとした赤顔で彼女はボクの顔を見ながら恥ずかしさを覚えていた。
「はぁーはぁ……僕は好きだよ……綾波の事……だからしてほしい」
「恥ずかしい……でも……私……」
恥ずかしがりながらも差し出したチンポを彼女は大事そうに先端から口に運んでいく……舌の動きと喉の奥が当たるまで口に運び込まれたボクのチンポと彼女の口からいやらしい音が聴こえて激しい快楽に包み込まれていた。
「……凄く……きもちいい……」
「はぁ…碇くんの味……いい……美味しい…」
シックスナインと呼ばれる体勢になり夢中にフェラチオをしている彼女の膣内に薬指を入れて刺激していく……愛液に濡れているせいか潤滑されて今にも挿れて欲しそうな程にスルリと入っていく。
「ひやっ……あぁぁん……」
「今日はエッチな綾波が見れてうれしいな……ボクのココが綾波のが欲しくて仕方ないんだ……」
「私もほしい……いかりくんのほしいよぉ」
狂ったようにねだる彼女にボクはただ興奮するばかりでそのまま射精をしそうになっていた。
「綾波……ゴメン……逝っちゃうっ」
絶頂を迎えたボクは彼女の顔と髪の毛に濃いザーメンを大量にかけてしまった。
「はぁはぁ……あ……綾波」
「碇くんの……濃いミルクがたくさんかかったわ」
彼女はそれを大事そうに手と舌を使って口に運んだ。とても美味しそうにボクのザーメンを飲み干している顔を見てボクはまた欲情しているのを覚えた。
「美味しい……ねぇもっともっと碇君が欲しい」
「どこに欲しいか言って欲しいな……おまんこに欲しいものを言って……」
「はぁはぁ……そんなの恥ずかしい……」
彼女はボクの前で俯き加減で視点が合っているかわからないくらいにトロンとした表情で赤らめながら言った。
「わたしのおまんこに……碇君の精液をたっぷり流し込んでくださ……いっ」
彼女は正常位と呼ばれる体制で自分の指で膣口の奥が見える程に抉じ開けてボクに見せてきた。サーモンピンクに火照った膣内を恥ずかしがりながらも抉じ開けている、膣はヒクヒクと緊張して尻穴まで続く愛液で濡れていた。
「はぁぁあ……こんなにエッチなの反則だよ……綾波……挿れるよ……」
先端からゆっくりと挿入していく、スルリと入

りそうに思えたが思ったよりも締め付けがあり、なかなか上手く入らなくて困った。
「ゴメン……ちょっと手間取っちゃって……」
「はぁはぁ……碇君大丈夫よ……来てほしい」
二人で軽くキスをして、足を上に上げて膣の奥まで入るように挿入していく、膣内の突起が陰茎に纏わりついてくる。挿れた瞬間で絶頂してしまうくらいに心地よくてたまらない。
「あぁぁっ……いやぁぁっ……膣に入ってくるぅ……いいっ！！ああっ」
彼女の顔を見ながら、腰を上下に動かしていく、ズップリと奥まで入った膣口は動かすたびに愛液が必要以上に溢れてくる。
「気持ちいいっ！！ああっ……もっと……もっと」
「綾波の膣……きつくて気持ちいいよぉ……ああっ！！腰が止まらないよぉ」
上下に動かしていくたびに快楽が襲ってくる、段々膣に慣れてくると激しく突いていく。彼女はそれに合わせて声を漏らしては溶けていく。何かに縋るような感覚。ボクはずっとソレを求めていたような気がした。
「あっあっ……ああっ……碇君のが奥まで当たって気持ちいいっ！！いくっ……出ちゃうぅ」
彼女は気持ち良過ぎたのか膣を刺激されたので快楽に耐え切れずに逝きながら水を漏らしてしまった。二人の液が混じった水は周りに飛び散った。
「はぁっ……はぁはぁ……ごめんなさい」
「ううん……いいよ……気持ちよかったんだよね、うれしい……次は一緒に逝きたい」
「一緒に逝ってほしい……私の中にいっぱい出してぇ」
口と口が纏わりつくくらいのキスを交わしながら、膣内へと激しく突いていく。前よりも感度が上がっているせいか突くたびに火傷しそうな程に溶けていく。
「あっああっ……熱い……あついよぅ」
「グチョグチョのいやらしい綾波のおまんこ気持ち良いよぉ……ああっ……また逝っちゃうよぉ」
熱くて仕方がない二人の秘部が絶頂に近くなるたびに鼓動と速度が早くなる。ボクは絶頂に達しかけていた。
「シンジく……ん……私もいっちゃう……ああっ……来てぇ……私のおまんこにたっぷり出してぇ……全部ぜんぶ受け入れちゃうぅ」
「お母さん……逝っちゃうよ～逝っちゃう……おかぁさぁぁん！！」

*

綾波の部屋にいた僕はいつのまにか乳白色の空間に誘われていた。
白い液が飛ぶ時のようにスーッと生気を吸い取られそうになりながら赤子のゆりかごに揺られ何も忘れてしまいそうなくらいに心地よい空間にいた。まるで生まれる前みたいな感覚。『ずっとこのままでいたい』と思った。だけどミサトさんや綾波、アスカ、そして皆の顔を思い出した僕は心臓の音と共に小鳥の鳴く朝に医務室のベッドで体を横たえているのを肌で感じた。
ふと見ると横には綾波がいて何事も無かったように見守ってくれている。まぁ……いつもいてくれているけれど嬉しかった。一人でいるより嬉しかった。
「綾波……僕は一体……」
「三日程、寝たきりだったのよ……わけわから

ないことばかり言っていたわ」
「僕の事、ずっと見舞いに来てくれていたんだ。ありがとう……」
　僕は今の自分で一番作れる笑顔で綾波に伝えたのにも関わらず、御礼を言ったつもりが綾波には好印象では無かったようで寧ろそれより嫌悪されていそうな雰囲気だった。そして次の瞬間、頬に平手打ちをされた。
「お母さん、お母さんって煩い、さよなら」
「待ってよ……僕にはお母さんは……」
「でも…助かったのは……本当に安心したわ……もう帰らないかと思った。栄養剤、打っていたみたいだけど、食事……テーブルに置いてあるから取りに行ったらいいわ。じゃあまた会いましょう」
　パタパタと走りながら綾波は医務室を出て行ってしまった。もう慣れたけれど綾波の事はいまいち掴めていない。
「イタッ……急に平手打ちは無いよ……」
　しかし、どうして母親の事を呼んだのだろうか……訳がわからない。言っている本人すら分からないと言うのに言い訳が思いつかない。
『あの時の綾波は凄く優しくて暖かくてまるで……昔からいたような……』
「難い事はいいか……それよりも助かったんだ」
平手打ちされた場所を頬を撫でながら、これまでに無かったような余韻を噛み締めていた。

了

後書。

サキエルringが欲しいけど手が出せません…時愛です。
今回のエヴァ本は如何だったでしょうか？
プラグスーツだらけだったので、凄く大変でしたw
なのでちょこっと簡略化したり、変えたりしてますっ。
またエヴァ本描きたいなぁ…。。
今回描けなかったレイが描きたいのです！
新劇場版のレイ、可愛すぎて反則ですw
というか、新劇場版はアスカもレイも可愛すぎ！
マリは可愛いというか、かっこいいですよね。皆、魅力的。
そういえばエヴァってことで、タイトルロゴにサキエルが居たりしますw
お気づきになられたでしょうか。
あと前書、後書のデザインをエヴァっぽく考えたりして。
アメ〇ーークでまたエヴァンゲリオン芸人して欲しいなぁ。
オ〇エンタル〇ジオのNさんのトークがナイスですw

次の本もお付き合い頂けたら嬉しい限りです♪
それでは、またお会い出来る日まで～

2009・12月　雪路時愛
http://ncyakmmu.x.fc2.com/
↑是非おこしくださいませっ♪

この度はふたとりかるをご購入していただきそして手に取って頂きありがとうございます。
読了された方は今一度ありがとうございます。
『ふたとりかる』という事で劇場版エヴァに掛けまして、『Theatrical（シアトリカル）』の劇場風や演劇という意を借りています。
さてさて、今回の作品ですが、【これは夢なのかそれとも現実なのか】
臨死体験をしている途中のような感覚を入れて書きたいと設定してから書き始めていました。
かなり甘い二人になってしまいましたが自分自身これもまた冒険心あっての事でした。
タイトルの名は『エクスペリエンス　ニアデイズ』『コレまでに無いような死の体験』という意味合いで
そして【デイズ】の意味合いの日々を掛けてみました。
今回の作品は掛けてばかりですねw私の趣味でもあります。
今回の作品は自由気ままにさせて頂いた感じで心地良く書かせていただきました。
また次回もこういう場があれば書いてみたいです。
では、また。

2009年　ゆく年くる年　　味燐ふーか
真夜中におしゃべり(blog)　http://blog.livedoor.jp/sora_san3/

奥付

■ ふたりがる ■

発行日：2009. 12. 31

イベント：ComicMarket77

発行：んーちゃかむーむー

著者：雪路時愛＆味燐ふーか

HP:http://ncyakmmu.x.fc2.com/

Mail:n_cyak_mm@yahoo.co.jp

印刷所：太陽出版様

18歳未満閲覧禁止

本作品の登場人物は全て20歳以上です。

画像の転載、データ化、web等でのデータの共有はご容赦ください。

生意気うさぎ
2008 4/27
世界地図は血の跡